

葬送儀礼を振り返る①

大正大学文学部人文学科

教授 村上 興匡

(むらかみ こうきょう)



1. 今日の葬送儀礼をめぐる状況

近年、日本の仏教と葬儀をめぐる状況は大きく変化をしてきているといわれる。従来、亡くなる人全体の九割以上は仏教式葬儀で葬られてきた。葬式をせずただ遺体を火葬するのみの「直葬」や家族のみで葬式をおこなう「家族葬」といった葬儀簡素化の動きや、ふるさとの墓を整理する「墓じまい」など「墓」や「先祖」の継承を途絶する動きが見られるようになった。こうした変化の背景には、地方から都市への人口移動(都市化)や少子高齢化による家族や人間関係の変化(個人化)の問題があると考えられる。背景には年間三万

人を超える孤独死に代表されるような人々の孤立状況があり、生きている個人を中心とする生死観によって、「終活」や「断捨離」など「他者に迷惑をかけない」ための死に支度のブームが生み出されているように思われる。

本稿では、三回にわたって、日本における仏教と葬儀との関わりや歴史を振り返りながら、葬儀と社会変化の関係、「死」を扱う文化の意味について考えていきたい。

2. 日本における仏教と庶民葬儀の歴史

六世紀に日本へ公伝された仏教は、奈良時代には、朝廷が寺を作

り(官寺)、正式な僧侶としての資格をあたえる(官僧)、国家仏教としての体制となった。官僧である僧侶は、経典研究のほか国家鎮護の祈祷を行うことが主な任務であったため、死穢をさける必要があり、天皇や大貴族の葬儀を除いて死者に関わることはなかった。平安後期になり、官僧としての立場をはなれて、個人の救済を目的とする遁世僧とよばれる僧たちが現れ、仏教が一般の人々の葬儀に関わるようになった。

①末法思想と浄土信仰

平安末期の永承七年(一〇五二)から、教えはあっても正しく修行できず成仏することができない末法の世に入ったとされ、阿弥陀如来を念じて、死後その浄土に赴いて悟りを開くという浄土信仰が広まった。この頃、恵心僧都源信により、阿弥陀の浄土に生まれるための念仏実践の指南書として『往生要集』が著された。当時、阿弥陀の姿形を観察する「観想念仏」と、阿弥陀の名号をとなえる「称名念仏」の両方が用いられたが、元々は「観想」により比重が置か

れていた。死を迎えるための正しい作法である臨終行儀を実践する二十五三昧講が貴族階級を中心に盛んとなった。芥川龍之介が『今昔物語』に素材を求めた「六の宮の姫君」では、死に瀕した姫君に阿弥陀の御名を唱え仏の姿を念ずるよう勧める高德の法師が描かれている。『往生要集』の臨終行儀には、西向きに無常院という建物をつくり、病人がいたらその中に寝かせる。堂の中に安置した仏像の左の手中に繫いだ五色の幡の先を病者に握らせて、仏に従って浄土に往く思いをおこさせる。看病人は香をたき花をまいて、病者を莊厳する等の、臨終の作法が記されている。宇治の平等院鳳凰堂の阿弥陀来迎図や、金戒光明寺の山越阿弥陀図には、臨終の信者を迎えるに來る阿弥陀如来が描かれた。

鎌倉期になると二十五三昧講は全国的に普及するが、僧侶が中心であったものから在家を中心とするようになり、また正しく臨終を迎えるものとしてではなく、死後に葬儀として行われるようになってきたのである。今日と同じように、死んだ後に戒名を与えて僧侶とし

(没後作僧)、浄土で修行をさせる形がとられた。墓地の中に往生院が設けられ、墓堂を守る二十五三昧聖は御坊(おんぼう)と呼ばれた。

十一世紀くらいまで仏教式の葬儀は一定以上の階層のためのものであり、同じく芥川龍之介の「羅生門」に描写されるように、庶民が亡くなくても遺体は特定の葬地に遺棄されるだけであり、埋葬されたとしても定期的に墓参されることはなかった。

② 清規と庶民仏教葬儀式の形成

唐の時代の禅僧、百丈懐海は、僧堂において日常生活を行う上で規範である「清規」を制定した。その後、宋代に作られた『禅苑清規』には、尊宿(そんじゆう)〔住持〕となった僧(ほうそ)のための葬法と、亡僧(ぼうそう)〔修行途中でなくなった僧〕のための葬法の二つが定められていた。亡僧葬法には、湯灌や位牌、回向など今日の仏式葬儀でも行われる項目が並んでいる。この亡僧葬法をもとにして、現在の日本仏教各宗派の在家庶民のための仏教葬儀の儀礼の様式が形成されたと考えられる。

③ 「家」の成立と寺檀制度

竹田聰洲は開創伝の調査により、ほとんどの寺院が応任の乱のあった応仁元年(一四六七)から徳川幕府によって「諸宗寺院法度」が出された寛文五年(一六六五)までの約二百年の間に開創されていることを明らかにした。この時期は中世の武士同族団による支配と荘園制が崩れ、近世以降の「村」組織の原型となった郷村制が成立した時期であり、中小農民が台頭し、個々に独立した「家」が確立してくる時期でもあった。それまで外から来訪する宗教者に死者の供養を依頼していたものが、幕府が定住化を進める政策をとったこともあって墓地内の墓堂が寺へと発達した(墓寺)。生産の基盤である土地を累代に継承する「家」は祖先祭祀を発達させることになり、それが仏教の葬式、供養儀式と結びついた。阿弥陀信仰をもつ浄土系諸派や、早くから在家向けの葬儀の様式を確定していた禅宗がこの時期に、大きく教線を伸ばした。自生的に発生してきた「家」と寺との関係の上に、切支丹禁制を目的とした宗門改めや寺請制度

が制度的な裏付けを与え、今日の寺檀制度の基礎を作ることとなったと考えられる。

3. 仏教と「死」を扱う文化

日本における仏教葬儀の変遷を見るならば、天皇や大貴族のために発達した「死」をめぐる苦しみに対応する文化が、江戸時代を経て庶民一般にまで普及してきたものと考えることができる。

そもそも釈迦は葬儀をするなど遺言したのであり、仏教が葬儀に関わるのはおかしいと、死ではなく生の問題に関わるべきとの意見がある。そもそも僧侶は悟りを開くために修行をするものであり、葬儀を行うことは余儀であるという人もいる。しかしながら、葬儀が大部分の寺院にとって経営の根幹をなしてきたというばかりではなく、そもそもその開創された大きな理由であった。

四苦八苦の中に死ななければならぬ苦しみ(死苦)や、大切な者を失う苦しみ(愛別離苦)があるように、「死」は仏教に関わるべき根本問題の一つであり続けてき

たといえる。葬儀不要論が唱えられるたびに、反論として葬儀の持つデスエデュケーション(自己の死をいかに受け入れるか)やグリーフワーク(遺族の悲嘆をいかに癒やすか)の機能が主張されてきた理由でもある。他と明確に区分された自分があり、死によってその自分が無くなると考えることこそが「死苦」のはじまりであり、仏教の教説や儀礼を通じて、自分のいのちが自分の血縁や血縁以外の生きとし生ける者とのつながりの中で生きていくことを自覚することによって、「死」に由来する苦や悲嘆を癒やすことが可能となるのである。

村上興匡(むらかみこうきょう)プロフィール

一九六〇年群馬県生まれ。東京大学大学院人文科学研究科修了(宗教学)。文学博士。天台宗総合研究センター研究員。群馬県高崎市天台宗妙典寺副住職。編著書に『慰霊の系譜―死者を記憶する共同体』『社葬の経営人類学』など